

体力を使って学問をする

日本語日本文学科 小川 晋史

一般に文系と呼ばれるような分野というと、皆さんはまず何を思い浮かべるでしょうか。なんといっても、本（文献）が象徴的ではないかと思います。研究者はひたすら本を読んでいて、部屋にはうず高く本が積まれているといったイメージがあるのではないのでしょうか。そのようなイメージというのは、決して的外れなわけではありません。本や論文をひたすら読み込み、必要な書物を買ったりしているうちに部屋が本で埋まってしまうというのは、控えめに見積もっても相当高い割合で研究者に当てはまることだからです。しかしながら、研究室の外で体を使うことが必要な場合もあります。私は文学部で社会言語学・方言学という分野の講義・演習を担当していますので、本稿では社会言語学・方言学の中からいわば「体力が必要なジャンル」を紹介してみようと思います。

まずは社会言語学から「言語景観」（英語では“Linguistic Landscape”）と呼ばれるジャンルを紹介します。日本では研究され始めてまだ半世紀も経っていない若いジャンルなのですが、言語景観研究が対象とするのは、町にあふれていることばです。とりわけ、視覚的に捉えることができることばを対象とする場合、看板や案内図、あるいはパンフレットやチラシなど、町にあふれるさまざまなことばが書かれた物を見るような研究が多いです。これらを見ることで、そこに表されている言語は何か（日本語（標準語）、英語、方言、など）、字体や色、目的、デザインはどうかなどを明らかにしていきます。言語景観研究によくある視点としては「多言語化」というものがあり、おおざっぱに言うと都市に日本語以外の言語を話す人（住民・観光客）が増えると、案内版などで多言語表示がなされる傾向があります。東京の公共交通機関やデパートにおける表示を調べた研究では「日本語・英語・中国語・韓国語」による4言語（あるいはそれ以上）の表示が増えてきていることが知られています。今年度の私の演習では、学生たちと熊本（市）の言語景観を取扱い、先行研究が東京で行っているのと類似の調査を試みましたが、やはりというべきか東京には及ばないようで、多言語表示（とりわけ日・英の2言語表示より多いもの）は一部の観光地や駅などに留まる傾向にあるようです。熊本が観光に力を入れるのであれば、今後そういった面の整備がなされるとよいだろうなという感想も持ちました。

さて、ここまで言語景観研究の話をしてきましたが、その命と言えるようなものがあります。写真（映像）です。視覚的に捉えられることばを扱っているので、町中の写真を撮りまくる必要があり、必然的に歩きまわらねばなりません。看板などは人の集まる場所にあるわけですから、車を使って楽をするわけにもいきません。最近は google ストリートビューのような、インターネットで町の風景を見ることができるとはありますが、小道には対応していなかったり、画像が取られた時期が古かったりします。やはり基本は自分で町を歩くことです。そうすると、必要なのは「体力」ということになります。例えば熊本駅1つを調べるだけならまだいいですが、「上通り周辺と下通り周辺の違い」をテーマとした研究をしようとするれば、熊本の方言でいうところの「マチ」周辺を小道までくまなく歩きまわる必要が出てきます。しかも、単に歩くだけではなく上から下まで首を動かして看板や標識を探し、写真を撮りながら歩くことを想像してみてください。写真を撮ればその写真を撮った場所を地図に書き込んだりもせねばなりません。結果として、非常に体力が物を言うことになるのです。

次に、方言学をやっている最も体力を使うことといえば、何といたっても移動だと思えます。方言学では方言の話せる方（話者）の協力を得て対面調査をすることがしばしばあります。簡単な情報を確認するのであれば電話で済むこともありますが、直接話者にお会いして方言を教えてくださいということが基本になります。そのため調査の対象となる方言によっては、現地に行くのにとっても時間がかかります。私自身の経験でいうと、かつて東京に住んでいたときに、沖縄県の波照間島（有人島としては日本最南端）に調査に出かけたことがあります。東京の自宅から羽田空港までが電車で2時間、羽田空港から石垣空港までのフライトが4時間弱、石垣空港から港に移動して、港から船で2時間半かけて波照間島につくという行程でした。これに待ち時間等を加えると移動に全部で12時間くらいかかりました。東京から12時間あれば、ヨーロッパまで行ってしまうことを考えても、かなりの時間を移動に費やしているわけです。しかも、波照間島の場合は移動疲れもありますが、船が外洋に出るために酔いとの戦いもあって、これが体力を大きく削るというつらさもありました。

移動で実質的に1日つぶれるわけですが、観光でなく方言調査をしに来ているわけですから休むわけにはいきません。到着した次の日からは、話者にお会いしての方言調査に入ります。しかし、方言調査というのは話者にとっても決して楽なものではありません。したがって、例外もあるにしても私は1回（1日）あたり2

時間というのを原則にしています。1日あたり2人の話者に調査をさせて頂いたとして3日滞在すると、 $2人 \times 2時間 \times 3日 = 12時間$ の音声データが録音できることになります。往復の移動時間が $12時間 \times 2回 = 24時間$ であることを考えると、およそ移動に費やした時間の半分のデータが収集できるわけです。調査の時にはハプニングもつきもので、「突然天気が良く（悪く）なったから仕事をしなければならぬ」といったように、予定していた話者の方にお会いできない場合もあることを考えると、1週間の出張をしたとしても移動時間分の録音は絶対に採れないということになります。効率が良いか悪いかを考えても仕方のないことで、録音時間を増やしたければ調査回数を増やす以外の解決法はなく、基本的には何度も現地に行く（あるいは長期滞在）しかありません。このように、体力と時間をかける以外の解決はないというのが、方言学分野の現地調査なのです。それでも先輩の研究者に聞く話では、数十年前は航空券の値段が高くて調査には船で行っていたそうですから、今は多くの地域で移動のつらさが緩和されているのだと思います。

ここまで体力が必要な学問の話を書いてきましたが、文系と呼ばれる学問のイメージが少しは変わったでしょうか。実はこの体力を使って学問をするというのは、研究者にとって重要なのです。特に、学生あるいは大学院生に代表されるような若い研究者というのは、難しい理論や既発表の知見に関する理解については、年上の研究者に太刀打ちできない部分があります。しかし、体力を使って新しいデータ（1次資料）を見つけたり集めたりすることができれば、それは世界で誰も持っていないデータということになります。そのデータを活用することで研究歴の差を埋め、若い研究者が年配の研究者に負けられないような成果を挙げることにもつながるのです。私も研究者の世界ではまだまだ若輩者（30代）ではあるのですが、大学院生などの若い研究者には、研究時間が確保しやすいということを生かしてどんどんと体力を使った研究をしてもらいたいと思っています。

